

第53回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

11月29日～12月1日、「手をつなごう未来（あした）へ」をテーマに京都の運動70周年を記念して開かれた「2019年日本のうたごえ祭典・京都」はロームシアター京都を核に3日間でのべ16500人が集い、心ひとつにうたごえを響かせ大成功をおさめることができた。

今祭典は大音楽会形式ではなく、音楽で届けることを重視したメインホールでの3つの音楽会、ノースホールでの全国うたごえ喫茶大交流会、ロームスクエアでは32団体出演によるパフォーマンス広場。全国から推薦された7部門の合唱発表会と「オリジナルコンサート」に310団体が出演。今回初めての祭典参加で「群青」「リフレイン」の指揮をしていただいた本山秀毅大阪音楽大学学長から「400人を超える大合唱は初めて。今回参加させていただいて一つの曲でつながる想い、共感を表現する『うたごえ』の大きな広がりを感じましたし、意味ある発信だと思えます」と感想を寄せていただいた。

紅葉に彩られた京都の秋は参加者の心の中も熱く、紅く染める大きな感動を呼び起こし、次期開催地である軍都から平和都市へと変貌を遂げた水の都・広島にバトンを渡した。

うたごえ運動は、一昨年から昨年にかけて10の創立70周年記念事業に取り組み、それらを全て全国の大きな力で成功させることができた。

今総会は、その成果と教訓のうえに、本年迎える被爆・終戦75年の節目の年を「核兵器禁止条約」発効の実現となる年に、安倍政権が企む危険な9条改憲発議と「戦争できる国づくり」を許さない年に、また、辺野古新基地建設及び原発再稼働を断念させる年に、それら「5つの止」を名実ともに実現させる年となるよう、安倍政権にピリオドを打ち人々のいのちと暮らしが脅かされることのない新しい時代を切り開いていくために運動が進むべき道をみんなで大いに論議する目的をもって開かれる。

情勢を見極め、「歌う日本国憲法請負人」であるうたごえが日本全国で、そして本年は世界を舞台に多くの人々に憲法のこころを伝えていくことができるように。たたかいは予断を許さないが、運動を創る仲間と知恵は揺るぎのない運動の宝であり、「歌」とともに世論を広げていかなければならない重大な局面を迎えている。

2019年度 活動のまとめ

□1うたごえを創り広げる活動

①「安倍9条改憲阻止」、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、「安倍暴走政権に止め」のうたごえ

ヒバクシャ国際署名は昨年10月に全体で約1052万人の署名が提出されているが、うたごえもすでに33都道府県45604筆がこの3年間で集められており、さらに署名活動を強めることが重要となっている。「被爆地だからこそ」の思いで、毎月9日に繁華街でヒバクシャ国際署名を取り組んだ長崎は、署名数16559筆（1/11現在）で全国をリードした。3千万署名はうたごえとして22763筆を集めた。

NPT再検討会議に合わせて開催が決まった世界大会 in ニューヨークにうたごえ代表団派遣の募集を開始し、100人をこえる代表が決定。

NPT歌集も発行。

調布九条の会から発足調布平和を歌う合唱団(5月)など「こわしてはいけない」無言館をうたう」も引き続き歌われた。

「戦争法に終止符を！ 音楽人・団体の会」は、6月に落語と音楽のつどいを古今亭菊千代さん、岡大介さんとともに開催。うたごえは全国からの有志で「こわしてはいけない…」を演奏。

大阪のちばりより沖縄合唱団が辺野古テント前でコンサートを行うなど、各地から沖縄へ足を運んでの連帯活動も行われた。また、70周年祭典で寄せられたカンパを「返せ沖縄うたごえ基金」に託し、辺野古基金に届けた。

各地で進んだ野党共闘と市民運動の取り組みにうたごえも参加。災害基金から台風被災地のうたごえに見舞金を送った。

②「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、歌う喜びをひろげる活動

祭典開催地の京都では、バイバイ原発、メーデー前夜祭、憲法集会をブレ企画として位置づけ演奏活動を行った。また、10000人うたう会大作戦で京都・滋賀で旺盛なうたう会活動を展開した。

平和都市宣言事業に参加した山形センター合唱団など、各地の夏の戦争展でも演奏活動を行った。全国的に、すぐに口ずさめる70周年記念創作の「約束のうた」がよく歌われた。

デイサービス、保育所の文化祭、母親大会などの各種集会など、大小さまざまな場所であらうたごえを届ける活動が展開された。50年前、全国で初めて共同作業所が誕生した愛知できょうされん第42回全国大会が開催され、朗読とうたで綴る合唱構成を取り組んだ。「ぞう5000プロジェクト」が呼びかけ、「ぞう列車が走って70年全国つながりコンサート」として、全国●カ所でぞうれっしやコンサートが開催された。

③多くの人が「こぞつて歌える」愛唱歌を創り出す

昨年も国民的なたたかひの中で、活発な創作と演奏が行われた。ちば

りより沖縄合唱団の沖縄に心寄せる創作、あいちトリエンナーレの表現の不自由展中止に抗議し再開を求める運動に連帯して創られた「平和の少女像」は記憶に新しい。全国の創作活動の高まりは、オリジナルコンサートにもよく表れていた。参加曲数は、2018年37曲を上回り、48の作品が集まり、参加者も例年になく多かった。「それぞれの持ち味を生かし優劣しがたく、個性的で作品レベルが上がって飽きさせない」(総評)は、すべての講評委員の一致した見解だった。しかし、「今回、福島、沖縄の歌が少なかったのは残念」「詩が長く、言い過ぎる傾向が有り、『シンブルで訴える旋律の力』の掘り下げられた作品が少ない」(総評)などの課題も指摘されている。

全国創作講習会は、年内に開催できなかったため、まずは次年度になるが、ブロックや県・産別・サークルなどできめ細かく講習会や創作を実施していくことも大切である。創作講習会・創作合宿は、北海道、大阪、九州、電通、国鉄、教育、新たに青森、愛知でも実施され、サークル単位でも集団創作ははじめ創作に力を入れているところがオリコンにエントリーしている。うたごえ新聞新年号で紹介の群馬・合唱団「こだま」は今までの集団創作の積み重ねの上に新たな指導者の存在が加わり、オリコン初参加につながった。

全国創作センターを発足、うたごえの作品データベース化へ情報収集を開始。大阪では地域版の創作センターも活動。

被爆75年6人のうたごえ作曲家によるオムニバスを作った。6曲が生まれ、2020日本のうたごえ祭典 in ひろしまで演奏が計画されている。

□2合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

①県、産別、全国の合唱発表会の取り組み

33都道府県、1ブロック、7産別、1階層で合唱発表会が行われ、1521団体が参加。高知が合唱発表会として位置付け。祭典開催隣県の滋賀で10団体の参加で久しぶりに開催。70周年を迎えた北海道、

祭典開催地京都も参加を広げた。

全国の発表会には、310団体が参加。一般の部A、Bの人数区分の変更により、引き続き運営上のバランスの良さとなった。交流の部の平日と日曜の偏りの大きさが課題となった。出演団体から要員を出すことの徹底においては、各団体の努力により運営上の改善が見られたが、全国からの参加にあたっての意識の問題など課題も見えた。会場条件と初日の開催時間をずらしたことで、一定の聴きあう状況が生まれた。8部門、並行開催が定着する中、聴き合い、学び合うという合唱発表会の原点を問う意識化が引き続き課題。

② 地方祭典、産別祭典など

県祭典は、北海道、山形、神奈川、長野、新潟、広島、長崎、佐賀の8県。ブロック祭典は九州ブロック、産別祭典・交流会は、教育、私鉄、国鉄、電通、医療、保育、自治体の7産別、階層では青年が開催。70周年を迎えた北海道の祭典は、アイヌをテーマにした合唱構成とともに大うたごえ喫茶も開催。神奈川も70周年祭典を厚木基地をテーマにした「湘南の風」を演奏して開催。教育祭典は青森のうたごえと、国鉄は宮城のうたごえと開催。

③ 2019年日本のうたごえ祭典・京都の取り組み

コンサートホールでの3つの音楽会は、テーマを鮮明に描き出し、うたごえで感動を届けるものとなり、うたごえ喫茶、パフォーマンス広場など、京都の運動の特徴を生かした総合的なうたごえ祭典となった。地元・関西と全国の音楽的、組織的連帯が支えた。

④ 2020年以後の日本のうたごえ祭典の取り組み

2020日本のうたごえ祭典 in ひろしま 被爆75年 ひかりにむかっては、春にはメイン会場のグリーンアリーナが決まり、10月に地元実行委員会が発足。準備が進んできている。

2021年以後については、祭典プロジェクトで開催候補地をあげて、

要請と調整にあたってきている。

□ 3 うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

「うたごえ発ジャーナル」としてうたごえ新聞をいっそう輝かせ読者を広げる

① 創造・組織・普及の力にし、読み・つくり・広げる活動

歌・音楽の輝き・感動を交流し、活動方針―5つの止め―を推進する力に、そして2019祭典・京都成功へと取材、全国の通信と合わせて編集。

音楽家や識者からは、音楽家松野迅、浅井敬壹、本山秀毅、右田隆ら各氏。落語家古今亭菊千代師匠。核兵器廃絶・平和へ東ちづるさん、被爆者山本宏さん、リトアニアの杉原千畝記念館シモナス館長、韓国のイ・オンスクさん、福島原発かながわ訴訟原告団唯野久子事務局長、世界平和アピール七人委員会シンポジウム等多彩な識者の登場は5つの止めを豊かに展開していく力となった。

全国の活動を反映する通信活動は、総数1098(各団体ニュース含)で、前年度比(1145)でやや下回ったが、各地からの9条まもれ、辺野古新基地建設反対、原発反対等の精力的な通信によって8回に渡る見開き特集を組んだ。中でも、沖縄の闘いに創作曲をもって沖縄と地元での活動を送稿した大阪・ちばりよく沖縄合唱団はじめ大阪のうたごえは通信総数154通と群を抜いている。

大阪のうたごえ事務局次長高砂保子さん、神奈川のうたごえ事務局長河野好行さん、愛知の藤村記一郎さん(13通掲載)らの自身の送稿とあわせて送稿を促し、活発にしている活動は特筆される。

「ぞう列車が走って70年」、各地で新たな出会いをつくり取り組織まれ合唱構成「ぞうれつしやがやってきた」上演の通信。

「ぞう70」のチェコでの演奏交流ツアー、タリン音楽祭参加記等の通信は国際的視野を広げた。

編集協力では、日本のうたごえ祭典・京都成功へつないだ京都のうた

ごえの企画提案・送稿。また、各地でのつながりからの取材対象紹介は紙面を豊かにした。

通信・企画提案の（つくる）活動が新聞を豊かにし、運動を豊かにする。全国的に見ると通信活動の偏りが多い。全体で活発にすることが求められる。

読者拡大では、32都道府県で721人の新読者を迎えた（1月8日現在）。拡大運動を活発にするために5月に組織活動者・うたごえ新聞読者拡大会議を開催した。会長の基調報告は、うたごえ運動の源泉・原点を解き明かし、経験交流と討論とあわせて、総合的な運動の中の組織建設、読者拡大の方向性を見た。

祭典に向けた取り組みと、奈良から転居してきたメンバーの勢いで、前年総会基数比でうたごえ新聞読者倍加を果たした滋賀。祭典の取り組みの中で「もれなくうたごえ新聞」を訴えた京都も前進。日常の総合的な運動の中の読者拡大が協議会として位置づいている大阪も読者を広げている。

ブロック会議などでの交流も力となった。

②うたごえフォーラムの全国展開

北海道・札幌・兵庫は県の会議の中で、佐賀は「うたごえ運動とは」の連続講座の中で開かれた。総合的なうたごえ新聞の活動として積極的な開催が待たれる。

④季刊「日本のうたごえ」運動づくりのテキストとして位置づけ、積極的に活用し、会員全員購読をめざす

今年度はNo.183～186を発行。「70年を糧に次へ」と祭典合唱発表会演奏批評の2つの座談会をメインにしたNo.183。「憲法と文化憲法を活かし、文化的に生きるために」中田進氏の記念講演と総総会発言のNo.184総会特集号。No.185、186は「2020年被爆75年核兵器廃絶へのうたごえ」を柱に編集。安井正和原水爆禁止日本協議会事

務局長、川田忠明原水爆禁止日本協議会全国担当理事からの寄稿は、世界の核兵器廃絶運動の流れとその中で、2020年NPT再検討会議成功・NY行動の意味、うたごえ運動への期待が語られた。

また、No.185は「ぞう列車が走って70年」原作者小出隆司、作曲者藤村記一郎両氏の寄稿。演奏創造で全国をリードする4団体がその実際を詳細に語ったパネルディスカッション。No.186の混声合唱組曲「こわしてはいけなく無言館をうたう」の作詩窪島誠一郎、作曲池辺晋一郎両氏の対談。寺嶋陸也氏へインタビューは音楽づくりへの深い示唆となった。

運動を進める上で貴重な本誌だが、会員全員購読にはまだ遠い。奈良蟻の合唱団の「守屋博之さんのコラム（うたごえ新聞『うたごえ時間』）、季刊の寺嶋陸也さんのインタビューを題材に学習会」開催等、学び合い、読者を広げることが求められる。

□4学習・教育活動

学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーを計画的に育てる

①日常の練習や活動の中の教育活動

全国各地で、今日的課題や時代を反映した選曲、記念作品による音楽会、集会での様々な形態での演奏活動などが旺盛に展開された。日常生活では、客演指揮、特別講師を招いた練習会など音楽表現の追求、学習も行われている。指導者の音楽づくりの向上と合わせて、ボイストレーニング、合唱団の声づくり、声合わせ、が大きな課題となっている。合唱発表会審査委員会や座談会では、うたごえ運動としての存在感、何を表現したいか、演奏の質、選曲、作品に対する想い、歌う楽しさ、届く演奏などが語られた。作品の題材となる人々、現地との交流、作品を深める努力など音楽を豊かにする活動も重要である。合唱曲の委嘱、編曲も多く、演奏の幅を広げている。全国合唱発表会はこれらを知り、学び合う良い機会である。うたごえ運動における創造の特徴、良さなど幅広く学習を深めていく必要がある。

②うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」などの活用

うたごえ新聞では各地の演奏会の紹介された。特徴、学ぶべき点、紹介したい内容など、より深い視点もさらに期待したい。季刊「日本のうたごえ」の特集記事は今日的課題、参考になる内容、合唱発表会総評や座談会記事など運動の創造、提言等、示唆に富む内容も多い。前年度の指摘がどう生かされているかなどの視点も重要。積極的に活用し、具体的な改善点とする必要もある。出版物は歴史的な視点も含めて、さらに学び、広げていきたい。

③各種全国講習会、各協議会やブロック等での指揮者・指導者交流

合唱講習会は、西日本が5月、滋賀県大津市で222名、東日本は6月、神奈川県横浜市で82名が参加。日本のうたごえ祭典・京都の全国合同曲を主な講習曲として、その音楽的な理解を深めるとともに各講師による音楽創造の可能性を学び合った。特に西では祭典参加運動とも直結し、リズム感、合唱表現など、祭典曲を大勢で学び合う充実した内容となった。東でも同様に祭典企画に呼応した講習曲で、東西の講習内容を統一をめざしつつ開催地の意見も組み上げ、同じ曲を別の講師で学び合うなど、多様な切り口を経験した。合唱講習会は日頃とは異なる音楽経験、大勢が集って学び合うなど、学びの宝庫。幅広い講師陣、新たなリーダーによる指導と継続、運動を前進させる選曲など、さらに充実を図る必要がある。

全国指揮・合唱指導講習会（教育講習会）は、6月、長野県松本市開催（88名参加）。発声、合唱、指揮法、理論講座と講習内容は毎回同じスタイルだが、課題曲は祭典全国合同曲を中心に選曲。常連参加者はもとより初参加者および合唱隊参加者の努力と集中により充実した講習会となった。特に合唱特別講座の講師、京都祭典でも本番指揮の本山秀毅氏は、声を合わせることをテーマに積極的に歌唱を指導した。指揮法特別講座の工藤俊幸氏は常に合唱隊と指揮者との関係を重視、作品の求め

る表現を的確に指導して毎回好評である。コース別指揮講座も含め、受講者は個々に課題を持つて参加することが重要、指揮の基本も含め、共通の曲で共に学び合うことは有意義。さらに新しい受講者を広げて運動内の指揮者を増やすことが急務である。合唱隊としての参加も様々な角度からの発見が多い。

理論講座として、神戸市役所センター合唱団、三多摩青年合唱団、関西合唱団、名古屋青年合唱団の各合唱団から日常的な合唱団の練習模様を報告、参加者と共に交流した。新団員の獲得、日常的な練習での工夫、外部講師による指導の回数と内容など、合唱団独自の教育活動を知り合う、指揮者・指導者が日常の実践を報告し合い学び合うなど、具体的に交流する機会となった。ネットワークづくり、情報交流等を検討して音楽創造のあり方を深め合うことも求められている。

地域、ブロック、合唱団単位の講習会、セミナー、指揮講座等も各地で行われた。北海道では70周年記念祭典の市民運動的な取り組みも視野に合唱講習会を開催。指揮法講座も継続。また、記念創作も併せて講習会を展開。九州では全九州の連帯で合唱講習会を毎年開催。東海のうたごえ交流会は若手も奮闘。

関西合唱団は日曜講座を継続して専門家の音楽指導を学び合い交流。愛知の「まなぼ企画」は合唱団練習見学、街頭でのソングリーダー実践、舞台スタッフ養成、合唱指導、創作など要求に基づく幅広い企画で注目を集めている。

合唱研究会、指揮勉強会、団内音楽発表会など、地道な勉強会も続けられている。次世代を担う新たなリーダーの入口としても有意義であり、継続的な努力が求められる。

④日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす

日本のうたごえ祭典・京都での全国合同は、より良い演奏を目指した演奏登録、また合同練習会も展開され、各音楽会の企画に沿った質の高い演奏を実現した。全国参加の早めの準備の重要さも、あらためて教訓

とした。

日本のうたごえ合唱団2019は129名で京都祭典・音楽会Ⅲで演奏。続く全国合同演奏の中心としても役割を果たした。全国協議会の方針のもと、祭典での演奏を主な目的として自主的に参加する合唱団だが、その実践から得る経験・交流は他にはない教育的な学習の場ともなっている。また毎年の運営の中で委嘱作品も生み出している。

□5 青年のうたごえ

学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーを計画的に育てる

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ

京都では、祭典に向けて青年の声を言葉にして集め創作曲「言ってみようや ぜいたくを」を創り、声を寄せてくれた青年にも祭典参加を呼び掛け広げた。長野のザ・イスカンドルは地域の合唱団とのつながりを広めようとハーモニー交流会を企画。励ます会、新年会などで演奏している。宮城の若星Z☆（わけすたーづ）は、ア・カペラ講座の継続とともに創作曲をまとめたCDを制作し普及活動にも取り組んだ。大阪の青年は大阪のうたごえ祭典2020成功に向け「国際交流のステージ」を中心に取り組んでいる。愛媛合唱団青年部「Green Love Cantabile」5周年演奏会に向けて他団体への訪問、うたごえ喫茶やストリートライブなど演奏活動に取り組み、一人ひとりが中心となり自分たちで作る光る演奏会として成功させた。東海青年のうたごえは辺野古や増税について地元の若者に講師を依頼、学習会に取り組み、青年祭典に向け他団体との関係を深めている。

②仲間、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める

3・1ビキニデー青年企画、Ring! Link! Zeroでは青年のうたごえとして実行委員会に参加。日程の関係で、青年のうたごえ

えとしての取り組みは実施できなかったが、被爆75年の今年は、多くの青年で参加して祭典参加を訴えたい。若者憲法集会では、東京青年のうたごえを中心に、70周年祭典で繋がった民青の人も一緒に「つながり」「いのちをうたおう」「HEIWAの鐘」をオーブニングで歌い盛り上げた。

③「日本のうたごえ祭典企画」青年交流会「京都」を青年のうたごえを活性化する場として位置づけ、青年を積極的に送り出し、「2019年日本のうたごえ祭典・京都」につなげる

音楽会の実施希望もあり、青年祭典として開催。全国から約80名が参加し、京都祭典の青年合同へのステップとなった。京都の青年が若者の想いを綴った創作曲も披露。合唱発表会には昨年と同じ21団体が参加。京都祭典・青年合同のステージに向けて現地・全国で練習会を重ね仲間を増やしながら協力して進めた。

京都では、新しいメンバーが青年祭典の実行委員長や京都祭典の組織委員長を務めた。愛知では5月に創立70周年レセプションを若手が運営の中心を担い、次の世代に運動のバトンが渡されている。

□6 サークル・合唱団・協議会づくり、ブロック連帯活動

①サークル・合唱団を新たにづくり、合唱団員をふやす活動

滋賀では、祭典をともに取り組む中、「合唱団「びわこの風」」を立ち上げ、祭典後も継続して活動へ。京都の合唱団みなみ風は、演奏会から祭典へとつなげた取り組みの中で団員を増やしている。加盟人数の登録が増えたところもあり、協議会の会員数は全体に増えている。

富山では県東部にうたごえを、とうたごえ喫茶が定着し、芽を膨らませている。

②合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊読者を増やすことを、サークル・合唱団で討議し、目標を持ち、計画的に増や

す活動

加盟は9団体。兵庫の女声コーラスゆずり葉は、神戸市役所センター合唱団女性部から発展。福岡の「いのち」の合唱団も、もともとの合唱団から分かれての加盟。富山では、協議会建設も視野に2017年日本のごえ祭典inいしかわ・北陸開催からの流れでNPO法人大空へ飛べ。2020年祭典へ、広島のたたら。粘り強い働きかけの中で、千葉の歌の広場、松戸教職員合唱団でだぬふあ、神奈川のコーラスひこう船、宮城の年金者合唱団「花の輪」。愛知のコーラスかえるは、地域祭典での協働から加盟。

前年までの教訓も生かし、加盟が組織建設の根幹と取り組んだ。神奈川でのサークルへ足を運んでの訴えなど、協議会の計画的な働きかけが加盟に繋がった。加盟の働きかけの中で個人会員も増えている。

③加盟団体500、協議会のない県での確立をめざす活動

意識的な継続した働きかけの中で9団体の加盟があったが、残念ながら退会も9団体と、全体としては加盟数は横ばいとなった。ブロック活動が活性化してきた関東ブロックでは、全県参加で交流会を行い、千葉、神奈川で加盟が進んだ。東北のブロック交流会は300人のうたい手でぞうれっしやコンサートを行った。関西ブロックはこの間の連帯を祭典開催運動の中で大いに発揮した。

3月、3年間の準備期間を経て佐賀で県協議会が発足した。富山が協議会建設を視野に活動。

□7事業・普及活動

①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする

70周年記念事業として出版された「ニューアレンジ合唱曲集・みんなのうた」は、3212部が普及され、多くの合唱団で収録された合唱曲が取り組まれた。

「うたごえは生きる力」(高橋正志著)、「池辺晋一郎の夢を見てますか」は、学習文献としての活用をすすめ、広く普及していく点では課題を残している。

2019メーデー歌集は昨年比で92・66%。23904部が普及された。10年前と比べて発行(普及)部数が減ったとは言え、うたごえの出版物としては今なお最大の普及数を誇り、2万人を超える方とうたごえがつながっているとも言えることができる。南部合唱団での、地域に入っている普及など引き続きうたごえを届ける活動の中での普及を大切にしたい。

みんなうたう会やうたごえ喫茶では、既刊の「うたごえ喫茶ソングブック828」が活用され、プロジェクトによるデータ版の活用も進んでいる。

国鉄のCDはじめ、各合唱団が取り組んだ演奏会のCDや楽譜の制作も各地で取り組まれている。愛知では、70周年の記念誌を出版、活動の歴史の学習と合わせ普及された。各地の普及の経験を収集し、全国に広めることも大切。合わせて引き続き著作権順守の啓蒙も課題。

②全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当をおき、事業普及活動を活発に進める

事業部担当を置いている合唱団はまだ一部にとどまっている。機械的に担当者置くのではなく、「この出版物を使ってこの人たちにうたごえを普及したい」という動機づけが重要で各合唱団の演奏活動と合せた事業普及活動の研究が必要。

③楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめ、新たな層へのうたごえ普及の力にする

音楽センターのサイトからうたごえの楽譜をダウンロードできる仕組みが作られている。音源もダウンロード購入ができるようになってきている。またこの間、様々なインターネットサイトにも直接出品していて、そこでの売り上げも伸びている。インターネットへのうたごえコンテンツの

紹介はさらに推し進めていく必要がある。各地の合唱団等でもこの仕組みを活用できるように工夫を進めたい。

□ 8 郷土のうたと踊り

① 東西郷土講習会を成功させる

日本のうたごえ祭典・京都の全国郷土合同に繋がる講習会等で、専門家を講師に迎え充実を図った。西日本が5月に、東日本が7月に開催した。西日本は、こうべ輪太鼓センター会館で銚子正調大漁節保存ひびき連合会のみなさんを講師に「銚子の早打ち太鼓」の講習と、すずめ踊り祭連「風羽里（ふわり）」の川口代表を講師に「すずめ踊り」の講習が行われ、63名が参加した。東日本は、「郷土芸能を現地から学ぶ、原点に立って福島へいこう！」と、福島双葉郡の広野町中央公民館で、元双葉町の「標葉せんだん太鼓保存会」のみなさんを講師に、新作太鼓演目「さくら」と伝統盆唄「双葉盆唄」の講習が行われ、30名が参加した。

② 全国の郷土活動、経験交流などを活発にし情報をうたごえ新聞に反映させる

東西郷土講習会のレポート等が掲載された。また、日本のうたごえ祭典・京都の音楽会Ⅱでは、「すずめ踊り」を全国郷土合同として、地元と全国から東・西郷土講習会参加者を中心に78名の演奏でオープニングを飾ったことや、8月に隔年開催の第15回兵庫県和太鼓と民舞のまつり、東日本郷土部会を中心に9月に開催された第22回江戸やっこまつり等もうたごえ新聞に反映された。

これまでのうたごえ祭典・全国郷土合同、宮城「雀おどり」、愛知「あゆちの鼓動」、愛媛「水軍太鼓」、石川「北陸のひびき」、東京「にぎわい江戸楽」が、和太鼓民舞まつりや合唱団のコンサート、各種集会で演奏され、経験交流と共に全国協議会郷土部会の開催、郷土講習会の取組みの成果として挙げられる。

③ 専門家・保存会との協力関係をすすめる

東西郷土講習会、日本のうたごえ祭典、和太鼓と民舞まつりの取り組みの中で、専門家・保存会との協力関係が進んだ。民謡集団は専門家をゲストに修了演奏会や45周年記念コンサートを開催。調布泊江合唱団郷土部跳鼓舞55周年の演奏会は国際交流をかねて開催。太鼓衆団輪田鼓は酒蔵公演や創作太鼓ドラマ「蒙古襲来」を専門家と上演。和太鼓、篠笛、民舞などの各種教室を開き、太鼓研修生修了演奏会開催など活動を広げている。

□ 9 専門家及び他団体との協働連帯活動

専門家及び他団体との情報交流、協力共同で音楽文化の豊かな発展をめざす

75周年記念委嘱作品への協力要請を行い、現在までに4人の方から承諾を得た。祭典の音楽づくり、講習会の講師、合唱発表会の審査員などで専門家の協力を得た。「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」も音楽以外のジャンルの専門家とも取り組みを進めた。

全国各地の合唱団が専門家の委嘱作品を依頼するなど、ともに音楽づくりを進めた。

原水爆禁止日本協議会との定期的な懇談会を行い、NPT再検討会議成功ニューヨーク行動に向けた取り組み、核廃絶の世界情勢や、世界大会、ヒバクシャ国際署名などの運動について交流しながら進めた。

□ 10 国際交流

アジア、世界への視点で75周年に向かう世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる

2019年祭典・京都では、京都朝鮮歌舞団をゲストに迎えた。

「ぞうれっしゃ」は、列車が走って70年でチェコ交流ツアーを108人で行った。韓国の平和の木合唱団との交流の中、3・1独立運動

100周年記念行事で韓国の国会議事堂前で日本語の歌を響かせた埼玉合唱団。タリン音楽祭、アウシュビッツを訪ねる演奏旅行に日本のうたごえ合唱団、男声合唱団、合唱団白樺が参加し現地の合唱団と交流も行った。さらに、全国協議会としての国際交流を豊かに進めていく検討が必要である。

うたごえ創立70周年から75周年に向かう 2020年活動方針

9条改憲発議を許さないたたかいに連帯し、うたごえのさらなる飛躍を私たちがとりまく情勢

〈人類存亡にかかわる2つの脅威―核兵器廃絶と気候の危機の阻止―のために〉

「人類は、存亡にかかわるふたつの脅威―増大する核戦争の危険と気候の崩壊とに直面しています。これらの脅威は人間が生んだものであり、ただ多数の人々の行動によってのみ押し戻すことができます」。 (NPT再検討会議と同時にニューヨークで初めて開かれる原水爆禁止世界大会のよびかけ文冒頭)

今年にはNPT発効50周年、無期限延長から25周年の重要な節目の年であると同時に被爆75年、国連創設75周年を迎え、再検討会議の成功を世界的に考える大きな機会となっている。さらに今年には「ヒバクシャ国際署名」の最終年でもあり2017年に国連で採択された「核兵器禁止条約」の批准が34カ国、発効まであと16カ国に迫り、核兵器のない世界へ扉を開く転換の年となることがいよいよ現実味を帯びてきている。唯一の被爆国である日本政府は米国の「核の傘」に依存し、批准も署名も無視して核兵器廃絶に背を向け続けている。

昨年、ローマ教皇として38年ぶりに来日したフランシスコ教皇は、

長崎、広島両市で同条約を支持し、核兵器の使用だけでなく、「核抑止」も厳しく批判したが、政府は「日米安保体制のもとで米国の核抑止力の維持・強化が現実的」と、戦争被爆国の立場を投げ捨て教皇の主張を全面否定した。日本全国の99%の自治体が加盟する平和首長会議（会長：松井一実広島市長）は、日本政府に調印・批准を求める要望書を採用し、住民・自治体レベルで世論を前進させている。

米国では約1400都市の市長が参加する「全米市長会議」が同条約を「歴史的な条約」として支持を決め、2020年大統領選の全候補者に核兵器廃絶の交渉で指導力を求める決議を採用した。

昨年暮れに開かれた国連気候変動枠組条約第25回締結国会議（COP25）では世界で5番目に多い温室効果ガス排出国である日本が石炭火力発電の廃止も温室効果ガスの排出削減目標の引き上げ表明もしないどころか、国内や他国への新增設を推進すると言明。日本政府の無責任な態度を世界に露わにした。一方で、いま世界で多くの若者が立ち上がっており、CO2排出ゼロをめざす運動で昨年9月末には日本を含む185カ国で760万人がデモ・集会に参加。西欧・北欧の一連の選挙では、温暖化抑制の緊急強化を前面にした政党が躍進している。

〈戦争の道開く9条改憲と中東派兵を許さない〉

安倍政権は相次ぐ閣僚辞任や「桜を見る会」疑惑への追及から、衆参両院の憲法審査会への9条改憲提示を見送りに追い込まれた。その一方で安倍首相は1月の自民党の仕事始めで「改憲は歴史的使命」とよびかけ、「必ずや私の手で成し遂げたい」と改憲への強い執念を示した。総裁任期の2021年9月を控え、改憲をめぐるたたかいは、本年の通常・臨時国会、来年の通常国会会期中に「改憲発議」と「国民投票」を許すかどうかの最大山場を迎えている。この緊急事態に「安倍9条改憲NO！全国市民アクション」は、取り組んできた3000万人署名にかえて、本年1月よりあらためて「安倍9条反対！改憲発議に反対する全国緊急署名」運動への取り組みを呼びかけた。

安倍内閣は、昨年末、米国とイランとの緊張状態が続く中東地域への

自衛隊の派兵を閣議決定した。今回は過去2回の派遣と違い自衛隊の海外での武力行使に道を開く安保法制成立後の初めての派兵であり、しかも憲法にもかかわる重大な問題を国会に諮ることなく閣議決定のみですませた憲法違反の暴挙である。1月3日には、米軍が大統領の指示でイランの革命防衛隊幹部を空爆で殺害。イランも「間違はなく反撃する」と米国に報復示唆。米大統領は、イランが攻撃を仕掛けたら大規模報復も辞さずと警告。この米国の横暴に世界から批判の声が相次ぐ中、日本の首相は一切言及を避ける恥ずべき姿勢を示した。その後米・イランの軍事衝突は当面回避されたものの、いま日本政府がとるべき道は、中東派兵を直ちに止め、米国に「イラン核合意」復帰を求め、憲法9条に基づく平和的外交を尽くすことである。

〈原発と沖縄辺野古新基地建設推進の破綻一層あらわに〉

昨年は日本の原発輸出計画が総崩れとなった。その原因として建設費高騰があげられるが、国内においても電力11社の原発安全対策費が年々増え、昨年7月時では総額5兆円超の巨額になっている。原発再稼働には膨大なコストがかかるうえ、今後さらに増額が見込まれる中、電源別で原発のコストを「最安」とした政府評価の前提が、ここでもウソとごまかしの詭弁であることが明らかになった。

東電福島第一原発事故から9年近い今も帰還できない地域があり、4万人余が避難生活を余儀なくされている。

防衛省沖縄防衛局は昨年末、辺野古新基地建設について、工期が当初の5年から12年、総工費を当初の2・7倍の9300億円とする試算を示した。公表の理由は大浦湾の軟弱地盤の大規模な改良工事が必要になったからであるが、地盤は最大で海面下90mまで及び、そうした工事は国内に例がないといわれている。

翁長前知事が当選した14年以来、知事選と国政選挙はオール沖縄が12勝1敗。県民投票では反対が投票総数の7割を超えた。土砂の投入量が全体の1%にしか達していないのも現地での座り込みなどの抗議が工事の見通しが立たない状況を生み出している。もはや辺野古新基地計

画は、土木技術・財政・環境のあらゆる面で破綻している。しかも政府はこれまで一貫して沖縄の海兵隊駐留や辺野古新基地建設の根拠を「日本防衛の抑止力を高めるため」としてきたが、すでに1980年に日米共同作戦計画で在沖縄海兵隊を「日本防衛」から除外する方針を決定していたことが米国防総省歴史書から判明、辺野古新基地建設に何の大義もないことがあらためて浮き彫りになった。

〈安倍政治終わらせる疑惑事件の徹底追及を〉

国民世論をことごとく無視してきた安倍政権は昨年末から今年にかけて2つの反社会的疑惑事件を引き起こし、政権の行き詰まりが一層露わになってきている。「桜を見る会」疑惑については反社勢力を首相枠で招待する等やりたい放題の政治の私物化が発覚。それに続き、安倍政権が「成長戦略の目玉」と位置づけ、国民の厳しい批判を無視して強行したカジノ解禁が引き起こした汚職疑惑が浮上、底知れない疑惑事件に発展する様相を呈している。

今回の汚職は、数兆円ともいわれるカジノの巨額利権をめぐる海外カジノ企業と政治家、政府の癒着が暴露されたもの。国策として賭博を推進しようとした安倍政権の責任は極めて重大で、カジノ解禁を白紙撤回させるとともに、これらの疑惑事件を国民世論と結んで徹底追及し安倍政治を終わらせなければならない。

〈憲法を生かし、表現の自由を守るために〉

あらゆる表現の自由を保障することが憲法の本質である。昨年8月、国際芸術祭あいちトリエンナーレ2019の「表現の不自由展・その後」が一部の展示品をめぐる電話やメールの脅迫を受けて開幕後3日間で閉鎖された。さらに文化庁が一旦決定した補助金7800万円の不交付を決定、まさに補助金を介した国の検閲に等しい不当処分である。最終盤の10月に展示は再開されたが、第2次安倍内閣発足以降、各地の公の施設で作品の発表、展示を正当な理由なく拒否する等表現の自由への侵害が続いている。

文化庁が2020年に向けた文化政策の戦略的展開として「文化芸術の振興に関する基本的な方針」(第4次基本方針)が2015年に閣議決定され、2020年までに日本国が目指す「文化芸術立国」の姿を初めて明示した。そこには子どもから高齢者まで、創作活動へ参加、鑑賞体験の機会を国等が提供する、文化芸術に従事する者が安心して希望を持ち働いていると描かれている。しかし、現実には消費税増税でますます国民が芸術・文化に親しむ機会から遠ざかっており、芸術・文化団体の経営や活動にも大打撃を与えている。芸術家や文化団体、文化施設等の活動が安定するためにも文化予算の充実が急務といえる。同予算は20年度概算要求額で1275億円、国家予算の0.12%に過ぎず、国民一人あたりわずか980円ほど。税金の使い方を変え文化予算の抜本的な増額が求められる。

(被爆75年から運動75周年へ夢の橋を架けよう)

本年は被爆75年の年。うたごえはこの節目の年に3つの取り組みに全力を挙げる。①今秋広島で開催される「2020日本のうたごえ祭典 in ひろしま」被爆75年 ひかりにむかって」を地元・全国の力で大成功させる。②被爆75年記念作品として出版される6人のうたごえ作曲家によるオムニバス創作曲集『風の音符たち』をひろしま祭典はじめ、全国各地で歌い広めていく(2023年の運動75周年に向けては池辺晋一郎氏はじめ6人の専門作曲家によるオムニバス創作作品を委嘱する計画)。③2020年NPT再検討会議&世界大会 in NY等国際共同行動に100名を超えるうたごえ代表団を派遣。この派遣運動を成功させるため、20人近い各分野の専門家によびかけ人(代表：森村誠一、池辺晋一郎)になっていただいた。事前の運動としてNPT反核平和歌集を作成。普及を図るとともに全国の運動資金づくりとして4月20日号うたごえ新聞に「日本政府に核兵器禁止条約の批准を求める1万人の『人間の虹』を架ける意見広告」を募集する。

うたごえは被爆75年から2023年運動75周年にむけて歩み始めた。いま多くの文化運動にとって必要なのは長期計画(ヴィジョン)で

あり、うたごえ運動にとつても大切なキーワードは「知性・感性・理性」といえる。来るべき75周年にむけて、うたごえの夢とロマンあるヴィジョンを打ち出す「運動75周年記念プロジェクト」を総会后に立ち上げる。また本年迎えるうたごえ新聞創刊65周年の記念事業についても早期に検討していく。

さらに加盟組織とうたごえ新聞読者拡大をあらゆる機会を通じて実践していくことが、運動発展の根幹である。常に情勢をどう見て切り開いていくか。うたごえの理念と役割をさらに磨き、高めることができるよう被爆75年から2023年、運動75周年に照準をあてた創造・普及・組織活動を推進するため2020年を以下の活動方針ですすめる。

被爆75年から運動75周年に向かう創造・普及・組織活動強化となる20年活動方針

方針(1)「安倍9条改憲発議」を阻止する最大の山場の年に、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、「安倍暴走政権に止(とど)め」の「5つの止」のたたかいで一致する市民共闘をさらに広げ、連帯しながら憲法のこころを広めよう

①「安倍9条改憲NO!改憲発議に反対する全国緊急署名」を全国で広めながら、3000万署名に協力してくれた人々を含め、あらためて署名運動の波を全国で起こし、歌や音楽で持てる力を發揮して改憲反対の世論を起こしていく。

・ヒバクシャ国際署名をNPT再検討会議成功へNY行動派遣運動ともからめて全国で広め強めていく。本年度も2万5千筆の目標を決めて取り組むとともに、「19日行動」はじめ全国各地での街頭駅前宣伝等を行ううたや音楽で改憲発議阻止をアピールする。

・サークル・合唱団・協議会で「戦争法に終止符を!音楽人・団体の会」への入会、賛同金の訴え等の取り組みをすすめる。同会として、専

門家とともにこれまで4回の取り組みを展開してきたが、今年開催の在り方、事務局の補強も検討していく。

② 沖縄県民のたたかいに連帯して、辺野古新基地建設を断念させるため座り込み行動など、「沖縄を返せ！うたごえ大行動本部」の取り組みを強化し、全国でも沖縄支援・連帯の取り組みを強めるとともに「沖縄を返せ！うたごえ基金」に取り組む。

・ 創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

③ NPT再検討会議&原水爆禁止世界大会 in NYに向けた派遣運動を「Before (運動づくり)」と「Action (現地行動)」と「After (帰国後)」の三段構えで成功させよう。

・ 100人を超えるうたごえ代表団の派遣、4/20号うたごえ新聞に掲載する1万人の「人間の虹」意見広告運動、全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同してNPTうたごえ会等を開催し、3・1ビキニデー、平和行進、世界大会につなげていく。

・ 学習教材としても活用できるNPT反核平和歌集を活用し、うたごえ会、コンサート等機会あるごとに広範な人々に広げ、4千部を早期達成する

④ 福島県では数多くの県民の声が第2原発の廃炉を決めさせ、原発立地県で初めて「原発ゼロ県」への道を開いたがいまだに立ち寄れない地域もあり、再稼働を許さない原発ゼロの社会をめざす歌をつくり復興支援の輪を広げる。

⑤ 東日本大震災ならびに災害被災地への支援を継続し、復興・再生をめざす思いを歌にして広げる。

方針(2) 人々の願いと結び、「みんなうたごえ」を旺盛に展開し、平和憲法を守り生かす「共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくり」のうたごえを活発に広げる。

① 「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びの機会と場を

ひろげる。

・ 日常の演奏・創造活動を発展させ、平和で健康なうたを普及する。

・ 全市区町村で多彩なうたごえ活動を展開し、創りうたい広げる普及活動を旺盛に展開する。

② すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、2023年運動75周年にむけた全市区町村での「みんなうたごえ」を計画もって実践する。

③ すべてのサークル・合唱団は職場にうたごえを届け、サークルづくりの計画をもって実践する。

④ 全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたごえ等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

⑤ 多くの人が「こぞうたごえを創る」愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

・ 昨年、創作作品を蒐集・管理・公開する機関として設立した「創作センター」の周知徹底ならびに創作活動の旺盛な展開を図る。

・ 「みんなのでづくり歌う運動」を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・ 全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全国各地でも講習会を開催する。

方針(3) 合唱発表会を地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす。

① 合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。

② 新しいところに積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らして豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③ 合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④ 合唱発表会のあり方について小委員会をはじめとした検討をもつ。

方針（４）地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

①うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

②「２０２０日本のうたごえ祭典 in ひろしま」を地元、全国の連帯で成功させ、２１〜２３年の日本のうたごえ祭典開催地を早期に決定する。

③祭典プロジェクトで検討した２４年以降の開催計画を具体化する。

方針（５）運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ発ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいつそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

①「読み、創り、広げる」を合言葉に、紙面の中からたくさん運動財産を学び、創造、組織、普及の力にし本年度目標達成のため新読者を２０００人増やし次期総会時には過去最高の読者を迎える。

②規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの全国展開を計画する。

③通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を３００人増やす。

⑤創刊６５周年記念事業を多くの専門家の協力も得てプランニングする。

方針（６）演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめる、次

代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

①運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視する。批評活動や運動の理論学習をすすめる前進への力にしていく。

②うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「グレート・ラブ」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見えますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

③各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協議会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

④サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画をもつ。

⑤日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針（７）青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年を迎える。

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間づくり、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③「２０２０全国青年のうたごえ祭典 in 愛知」を青年のうたごえを活性化する場として位置づけ、青年を積極的に送り出し、「２０２０日本のうたごえ祭典 in ひろしま」につなげる。

方針（８）サークル・合唱団をつくり協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的にすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

- ① サークル・合唱団をつくり、サークル・合唱団員を増やす。
- ② 合唱発表会参加団体、協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やす。

加盟団体500団体をめざす。

- ③ うたごえ協議会のない県の協議会確立を計画を持ってすすめる。現在2サークルある地域は今年度中の協議会結成をめざす。

- ④ 職場のうたごえの建設強化をはかる。

方針（9）うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

- ① 普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある。企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

・ 被爆75年記念作品「うたごえ作曲家によるオムニバス創作曲集」風の音符たち、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てください」
「2020メーデー歌集」
「NPT・反核平和歌集」など楽譜、文献、CDなどを活用し、多くの人々にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

・ みんなうたごえ、うたごえ喫茶の活性化やうたごえ普及のために、出版物の活用や普及に努める。

・ サークル・合唱団の演奏活動と結んだCD、楽譜などを出版し普及する。

② 全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当をおき、事業普及活動を活発に進める。

③ 楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめる、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

方針（10）「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にし、まちづくりにつながる活動を計画をもって進める。

- ① 東西郷土講習会を成功させる。

② 全国の郷土活動、経験交流などを活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

- ③ 専門家・保存会との協力関係をすすめる。

方針（11）専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう

① 各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会ははじめ、あらゆる機会をとらえて運動内外の専門家との協力共同をはかり、うたごえの創造的力をたかめる。

- ② 平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針（12）世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げるとりわけ、アジア、世界への視点で75周年に向かう国際交流の輪をひろげる。

おわりに

「誰も置き去りにしない」…東京新聞元日の社説に掲げられたタイトル。2015年国連サミットの会議で「持続可能な開発のための2030アジェンダ（政策課題）」が採択された。貧困、教育、気候変動など世界と地球を永続させるための17の目標をもつ。そこには2つの合言葉が光る。1つ目は「誰一人も置き去りにしない」。今世紀に入り、世界経済はグローバル化とデジタル化の道を突き進んでいる。AI（人工知能）や生命科学の進化が騒がれる一方で、いまだに数十億の人々が貧困にあえぎ、一握りの富と権力を持つ者との格差は広がり続け、採択後いまでも止

◆2020年主な日程予定

◎2020年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典 in ひろしま	11/21 (土)	11/23 (月・祝)
東日本合唱講習会	5/23 (土)	5/24 (日)
東日本郷土講習会	6/27 (土)	6/28 (日)
西日本合唱講習会	5/4 (月)	5/5 (火)
西日本郷土講習会	5/5 (火)	5/6 (水)
全国指揮・合唱指導講習会	6/19 (金)	6/21 (日)
原水爆禁止世界大会	8/4 (火)	6 (木) 広島
	8/8 (土)	9 (日) 長崎
産業別&階層別うたごえ祭典		
教育	9/12 (土)	9/13 (日) 長崎
私鉄	7/25 (土)	
国鉄	9/19 (土)	9/20 (月) 神奈川
医療	10/3 (土)	京都
自治体	9/20 (日)	京都
電通	10/3 (土)	10/4 (日) 埼玉
青年	6/27 (土)	6/28 (日) 愛知

まぬ紛争、テロ、人道危機…。2つ目は「地球規模の協力態勢」。すべての国の人々が「ちがいを超えて協力し、みんなに平和と公正を、生活や環境を守ることを強く求めている。社説には、子ども食堂が紹介されている。誰も置き去りにされず、多世代が頼り合う地域交流の場として、国連にも呼応し民間企業、団体などが支援する動きが勢いづいており、この賑わいを他分野にもどう広げていくか。民間だけでは限界があり、政治の原動力が不可欠だと問題提起を投げかける。

うたごえも「一人ぼっちの青年をなくそう!!」。一人から一人へとうたごえを広めてきた幾星霜である。

「むかし原発いま炭鉱」(熊谷博子著)には、三池闘争や太平洋戦争で強制連行された朝鮮・中国人労働者や米兵捕虜のその後など、国策や企業の論理に翻弄されながらもたくましく生きた人々の姿が描かれている。それは「5つの止」の闘いとも重なる。「歴史から何を学び、どう生かすか。人と人、地域と地域、問題と問題をつなげる坑道は、未来へと続いているはず」(著者)。

うたごえも現代の切羽(きりは)に立って、地域住民とともに未来へつなげる坑道を掘り続けていると言えないか。「うたごえは平和の力」うたはたたかいたともに」の灯りをともしながら、くちびるに歌を。今年も憲法のこころを歌の翼に乗せて、私たちは未来をきりひらく。